

土木工学・建築学委員会
デザインをめぐる知の構築と社会的理解分科会
(第26期・第4回)

議 事 要 旨

1. 日 時 令和6年11月8日(金) 10:00~12:00
2. 会 場 オンライン会議
3. 出席者 佐々木 葉・伊藤 香織・小野田 泰明・小野 悠・片桐 由希子・川崎 昭如
・近藤 存志・斎尾 直子・坂井 文・田井 明・高橋 良和・中嶋 節子
・松田 曜子・村上 暁信・山本 佳世子
※下線は欠席 事務局：藤田 崇志

4. 議題および決定事項

(1) 前回議事要旨の確認

7/26に行った第3回分科会の議事要旨を確認した。

(2) 斎尾直子委員からの話題提供

斎尾委員より、「イタリアンデザイン『PROGETTAZIONE プロジェッタチオーネ』および『CASA DI QUARTIERE 地区の家』について」と題し、多木陽介氏の活動等を通じたデザイン概念「プロジェッタチオーネ」についての話題提供と、地区の家の調査報告があった。続いて出席委員との議論が行われ、以下の意見が出された。

- ・ ドイツにはエネルギーなどの公共サービスを提供する民間組織があると聞いているが、イタリアの「地区の家(Casa del Quartiere)」が市民団体によって公共サービスや空間を提供している点で、共通点があるのではないか。
- ・ ドイツには「多世代の家(Mehrgenerationenhaus)」という「地区の家」と少し類似した仕組みがある。
- ・ 「デザイン」という言葉がイタリアに入ってきたのはいつか? → 英語の Design という用語がイタリアでも使われるようになったのは20世紀ということであるが、正確には確認が必要。
- ・ プロセスを重視する傾向はイタリアならでは? → このテーマで調査に行くとプロセスを重視する方々ばかりに出会うことになるので、それが全体の国民性かどうかは確認が必要。
- ・ アフリカやアジアで、住民が都市空間や都市サービスを自ら創出している実践に通ずるものがあると感じた。
- ・ プロジェクティスタは専門家のみを指すのか、それとも実践する市民も含まれるのか? → プロジェッタチオーネは、次世代の担い手にプロセスの重要性を伝えていくことを含んだ概念であり、プロジェクティスタは伝道者、教育者(Educatore)でもある、という点が特徴。
- ・ エンジニア、テクノロジスト、テクニシャンとプロジェクティスタの関係は? → テクノロジストの概念が近そう。テクノロジストがさらに他分野や社会との関係を築き、エンジニアやテクニ

ションに実践の意義を伝え、そのプロセスでプロジェクティスタになっていく、という感覚か。

（３）坂井文委員からの話題提供

坂井委員より、イギリスおよびロンドンにおけるデザインの考え方や施策の変遷の話題提供があり、デザインの目的を明文化し、評価手法としてデザインレビューを確立することで、都市空間の中でデザインがどのように牽引されてきたのか紹介された。続いて出席委員との議論が行われ、以下の意見が出された。

- イギリスでは都市・農村計画法により都市と農村が一体的に管理されているが、日本では都市と農村の間に線引きがあるため、バッファゾーンの管理が十分にできていないのではないか。
- イギリスはトップダウン型、日本はボトムアップ型であり、イギリスの手法をそのまま日本に導入するのは難しいのではないか。
- イギリスでは経済問題解決のためにデザインが必要とされ、そのためデザインの目的を明文化し、評価手法を確立してきた。日本でデザインを普及させるには、誰が牽引するか（国の省庁か自治体かなど）を明確にすることが重要である。また、デザインの目的の明文化も必要である。
- 日本で自治体がデザインを導入する際、説明責任が求められるため、説明しづらいデザインよりも説明しやすい選択肢に偏りがちであり、良い選択がしづらい状況がある。
- デザインを学際的なものと捉える伝統がイギリスのデザイン政策に影響を与えているのではないか？ → 確かにその傾向は強いと考えられる。都市をつくる人だけでなく、使う人にも重点を置いており、使う人へのリサーチ結果が都市空間に反映される文化がある。まさにデザインレビューは多面的に評価する手法として確立されている。

（４）その他

次回第５回分科会は、12/23（金）10:00-12:00 オンライン開催。小野田委員、久保田氏よりデザインと建築・土木・公共事業との関係性について話題提供。シンポジウムの企画について検討予定。

以上